

中国人日本語学習者の会話における「ワタシは」の 過剰使用について

劉 璐瑶

【キーワード】

中国人日本語学習者、一人称代名詞、ワタシは、過剰使用、I-JAS コーパス

【要旨】

本稿では中国人日本語学習者が会話場面で使用した「ワタシ+は」の過剰使用を確認した。「ワタシは」を意味機能により、「対比」「主題」「フィラー的な用法」「誤用」に分け、「主題」での過剰使用の特徴3種類と「フィラー的な用法」での過剰使用の特徴1種類を明らかにした。タイプ①は、S0段階における会話冒頭の「ワタシは」の使用であり、タイプ②は、S1段階における不用意な「ワタシは」の使用である。そして、タイプ③は、S1段階における連続の「ワタシは」の使用である。タイプ④はフィラー的な用法で、時間を稼ぐために“とりあえず言い出した「ワタシは」”である。また、この結論をもとに、日本語教育に応用し、中国人学習者の指導に役立たせたい。

1. はじめに

森山(2006)は、日本語は主観的な言語であり、視点が話し手に置かれやすいと述べている。日本語の一人称代名詞主語を省略することが多いのは、私自身が認知主体となり、私の目に映ったままの情景を描写しているために、私自身は表現の対象から外れているからである。一方、中国語や英語の場合、私自身を客観的に捉え、対象としてそのまま描写している、と論じている。

筆者は、中国人日本語学習者が会話する時、一人称代名詞、特に「ワタシ¹は」の過剰な使用を多々感じる。例えば「私は～と申します、私は研究したいテーマは～です」のような場合である。学習者の会話に自然さと適切な使用を求めるためには、「ワタシは」の使用およびその指導を欠くことはできないと思われる。

¹ 「私」「僕」「俺」などの一人称代名詞全般を「ワタシ」で代表させる。

2. 先行研究と本稿の目的

曾（2004）では、台湾の学習者が作文の中で使用した一人称代名詞には、省略可能なものが存在し、それは母語干渉が原因であると述べられている。しかし、曾（2004）は省略可能の基準や、過剰使用と認定した一人称代名詞についての分析を行っていない。

また、楠本（2010）は中国人学習者の初対面会話から、省略すべき「私は」は、初対面の名乗る際と、同一主題を連続的に繰り返す場合であると論じている。ただし、「私は」の過剰使用は初対面会話だけではなく、会話全般において多いのではないだろうか。

そして、張（2011）は KY コーパスにおける、中国語・韓国語・英語を母語とする学習者が使用した「私は」を「導入部における「私は」」「会話モードにおける「私は」」と「ロールプレイにおける「私は」」に分けた。また、文の述語により、「話者についての事実」「話者の意見」「話者の意志」に分け、「話者の意志」の文で使用された「私は」に違和感を感じると述べている。張（2011）は学習者の「私は」文における意味特徴を中心に考察しているが、過剰使用については論じていない。

「ワタシは」の過剰使用の問題は、必ずしも日中両言語の異なる文法項目に起因するものだけではなく、楠本（2010）が指摘するような現象を含めて、会話の進め方に起因するものももっとあるのではないかと予測される。

これらの先行研究を踏まえた上で、本稿は、中国人学習者が会話する時、日本語母語話者と比べ、どのような箇所に「ワタシは」の過剰使用があるのかを会話データを用いて確かめ、その特徴を明らかにする。なお本稿では、「ワタシは」の使用の総数および各意味機能における使用数を数え、中国人学習者が日本母語話者より有意に使用が多いと判定された場合を過剰使用とする。

3. 分析結果

本稿では「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」の以下のデータを対象とする。

- 分析対象者²：中国人学習者 141 人、日本語母語話者 50 人（第 3 回データまで）
- 分析場面³：ロールプレイ 1（RP1 依頼場面）、ロールプレイ 2（RP2 断り場面）
- 研究対象⁴：「一人称代名詞（ワタシ）」＋「は」

² I-JAS コーパスでは、中国語を母語とする学習者を調査地によって CCM（中国）50 人、CCT（台湾）50 人、JJC と JJE 34 人（国内教室環境）、JJN7 人（国内自然環境）と分けている。本稿では、CCM・CCT・JJC・JJE・JJN を一括して「学習者」、JJJ を「母語話者」と表記する。

³ 依頼場面：店長にバイトの日数を減らしてほしい。

断り場面：店長の「調理の場に入ってほしい」という依頼を断る。

⁴ 再帰代名詞の「自分」および引用文で使用された「ワタシ」は対象外とする。

取り出した使用数を表1にまとめる。学習者群と母語話者群の間で t 検定を行ったところ、5%有意水準で有意な差が認められた。そのため、学習者には、日本語母語話者と比べ、「ワタシは」の過剰使用現象が存在する、ということがわかった。

表1 話者別の「ワタシは」の使用数

話者	人数	使用数	1人あたりの使用数
母語話者	50	20	0.40
学習者	141	433	3.07
有意確率			0.00

4. 「ワタシは」の使用実態についての考察

4-1 「ワタシは」についての本稿の分類

本稿では「ワタシは」の意味機能によって「対比」「主題」「フィラー的な用法」「誤用」の4種類に分類した。

野田(1996)は「は」を主題と対比に分け、対比には明示的な対比の「は」と暗示的な対比の「は」があると述べている。明示的な対比の場合、対比対象が明示されているとする。例えば、(1)のように「私」の対比対象は「私以外の人」と明示されているため、「私は」は対比の機能があると考えられる。

(1)⁵ (母語話者 JJJ30 RP2)

K-12 そこで私は〈うん〉もう、あの周りの方(かた)のサポートも、一生懸命するので〈うーん〉料理の、調理場に入るのは、私以外の人で探していただけたら

しかし、対比対象が言語化されていない場合、「ワタシは」が用いられた文では、発話者は誰かと対比するために「ワタシは」を使用したとは言い切れない。特に学習者の発話の場合は、「は」の対比の機能を意識して「ワタシは」を用いたのかどうか、確認できない。従って、本稿では対比の「ワタシは」を、以下のルールに沿って判断した。

⁵ 本稿における用例の記号について、

- ① 用例番号の後：[前文脈] (発話者分類 発話者の調査番号 ロールプレイの種類)。会話の理解に支障がないとき、[前文脈]を示さない場合もある。
- ② Cは店長役、Kはバイト役(調査対象、「話し手」とする)、Kの後の数字は、この発話が当該ロールプレイの会話全体において何番目であるかを表す。
- ③ 発話内容はコーパスでの、会話データを文字化した文章そのままのものであり、発話文中の()は話者の間違っている発話文を直した内容である。
- ④ <>の中の内容は、話し手の発話と同時に発生した聞き手の発話で、基本的に相槌である。
- ⑤ 会話文が長いかつ会話の理解に支障がないとき、筆者により{前略}{中略}{後略}をつける場合がある。
- ⑥ 下線は筆者による。

- (2) 「ワタシは」が含まれる発話内、および当該の発話の前後に隣接している発話内に、対比対象となりうる相手が言語化されている場合に使われた「ワタシは」を、対比を表す「ワタシは」と判定する。

また、発話内容をまだ整理できていないうちに、実質的な意味はないが、とりあえず発された「ワタシは」をフィラー的な用法とする。例えば (3) のような、繰り返したり、言い直したりする前の「ワタシは」である。

- (3) [店長にお願いの意図を明示した後] (学習者 CCM11 RP1)

K-11 あのーんー私はあんー、あー週にーあーん、あの私は週にあん、せんにち (三日)、〈うん〉仕事があるんです〈うんうんうんうん〉そうですね? 〈うんうん〉そうですか? あんーににち (二日) に変わっていただけません

そして、中国人学習者の会話において、(4) の K-22 のような従属節の中で、「ワタシが」を使うべきところに「ワタシは」を使用してしまった箇所を「誤用」とする。

- (4) (中国人学習者 CCM19 RP2)

K-22 わ、私はまずい料理を作たら (作ったら)、けお客さんはきっと怒るでしょう、それそして、店えー、私のーレストランは来たお客さんは少なくなりますよ

最後、「対比」「フィラー的な用法」「誤用」以外の「ワタシは」を「主題」とする。すなわち、明確な対比対象がない、かつ文が意味的に完結している場合、主題の「ワタシは」である。話者別の使用数を表 2 にまとめる。

表 2 「ワタシは」の機能別の使用数

	人数	主題	対比	フィラー的	誤用	総計
母語話者	50	10 (0.20/50%) ⁶	10 (0.20/50%)	0 (0/0%)	0 (0/0%)	20
学習者	141	328 (2.33/76%)	50 (0.35/12%)	44 (0.31/10%)	11 (0.08/3%)	433
有意確率		0.00	0.09	—	—	0.00

表 2 で示しているように、学習者群と母語話者群の「主題」の間で、5%有意水準で有意な差が見られ、過剰使用が明らかになった。ただし「対比」では、有意な差が見られなかったため過剰使用とは認定せず、本稿では考察しない。また、「フィラー的な用法」は学習者特有の使用であり、過剰使用とする。「誤用」については、本稿で考察しない。

⁶ (X/Y) : X は 1 人あたりの使用数、Y は全体使用数における割合

4-2 主題の「ワタシは」

4-2-1 会話段階の区分け（S0 段階と S1 段階）

三上（1960:123）は「題目「Xハ」は非常にたいせつな成分ではありますが、相手がわかっていると思えば、一回一回繰り返さなくてもいいものですし、場面の状況で了解が成立していれば、初めから一回も言わなくてもすむことがあります」と述べている。

従って、「ワタシは」を使用するかどうかは、聞き手との間に、当該の場面や状況における主題が誰（何）であるかについての了解が成立しているかどうか、によって決まる。場面や状況への了解については、聞き手の意識を恣意的に判断するより、話し手が自らその場面状況を構築しているかどうかが大事な基準だと考えられる。すなわち、「ワタシは」という主題の存在する環境の構築は、聞き手の場面状況の了解に深く関わっていると考えられる。会話の進行につれ、「ワタシは」という主題の存在する環境をまだ構築していない段階から、構築した段階へ進んでいき、聞き手の場面状況への了解もそれによって変わっていく。従って、本研究は、話し手が「ワタシは」という主題の存在する環境を構築しているかどうかによって会話を S0 段階と S1 段階にわけるとする。

S0 段階とは、話し手が「ワタシは」という主題の存在する環境をまだ構築しておらず、聞き手が現行の発話を「ワタシ」について話されているものだと把握できていない、と考えられる段階である。すなわち「ワタシは」という主題の存在する環境の未構築段階である。

S1 段階とは、話し手が「ワタシは」という主題の存在する環境を構築しており、聞き手が現行の発話を「ワタシ」について話されていると把握できる、と考えられる段階である。すなわち「ワタシは」という主題の存在する環境の既構築段階である。

甲斐（2000:78）では「述語がどのような対象を主語として取りやすいかという主語と述語の結びつきは、主語の指示対象を予測する」一つの要因であるとしている。

話し手が発話するとき、特に会話の始め頃、今「ワタシ」のことについて話していると聞き手に明示していない段階は「ワタシは」という主題の存在する環境の未構築の段階である。その後、話し手の発話の中に初めて「ワタシは」という主題と呼応できる述語⁷が使用され、その述語は主題である「ワタシは」と結びつくことができるため、「ワタシは」という主題の存在を提示することができるのである。つまり、「ワタシは」と呼応する述語は、後ろ向きに働き⁸、この時点において「ワタシは」という主題の存在する環境を構築することができる、と考えられる。そして、話し手が「ワタシ」について話した後、聞き手との関係は、了解が成立していない段階から、明瞭な成立段階に入ると思われる。従って、本稿においては、「ワタシは」という主題の存在する環境の構築は、「ワタシは」という主題と呼応できる述語の出現によって判断する。

⁷ 以下のような典型的な挨拶表現と慣用表現を除外する。

「すみません」「申し訳ないです」「ありがとうございます」「元気です」など。

⁸ 当該発話以降の対話環境に影響を与える。

表 3 S0 段階・S1 段階まとめ

段階	意味	判断基準
S0	「ワタシは」という主題の存在する環境の未構築段階	「ワタシは」という主題と呼応できる述語がまだ出現していない
S1	「ワタシは」という主題の存在する環境の既構築段階	「ワタシは」という主題と呼応できる述語がすでに出現した後

会話(4)で、発話 K-4 の「料理できませんー」という話し手の発話文の中に、初めて「ワタシは」と呼応できる述語「できる」が使用され、以降は「ワタシは」という主題の存在する環境の既構築段階の S1 段階に入ると判定する。

(5) [調査 ID を提示した直後] (学習者 JJC15 RP2)

C-3 はい、えっと今日はお願いがあるんですけど、〈はい〉えっとー、今ホールの仕事してもらってますね、〈はい〉で、えっとだえ、料理のお仕事をしている人が、〈はい〉辞めてしまったのでー、料理の仕事に代ってもらいたいですけどー、できますかー？

K-4 はー、それはちょっとー、料理はできませんー、ですよ

4-2-2 段階ごとの「ワタシは」使用の分類

主題として使用された「ワタシは」は、その現れる位置によってタイプ①、タイプ②、タイプ③の 3 種類に分けられる。

タイプ①： S0 段階で、使用された「ワタシは」

タイプ②： S1 段階で、各発話ターンにおいて最初に使用された「ワタシは」

タイプ③⁹： S1 段階で、各発話ターンにおいて 2 番目以降に使用された「ワタシは」

以上の 2 つのタイプの「ワタシは」の使用された位置とそれらの関係を図 1 と図 2 で示す。

⁹ 同一ターンにおいて最初に現れたものが無助詞の「ワタシ」、または「ワタシも」であった場合、その後の「ワタシは」はタイプ③に属す。

発話文 ターン	NO. 1	NO. 2	NO. 3	...
G				
K		① 述語	③-1	
G				
K	②		③-2	③-3
⋮				

発話文 ターン	NO. 1	NO. 2	NO. 3	...
G				
K		述語	②-1	
G				
K	②-2		③-1	③-2
⋮				

図1 「ワタシは」の使用位置 (1)

図2 「ワタシは」の使用位置 (2)

図の水玉模様はS0段階の範囲で、斜線模様はS1段階の範囲を表す。上述の3タイプの「ワタシは」の使用は①、②、③で示し、同じタイプの使用でも、同じ会話において、何回も使用される場合があるため、使用される位置によって「②-1」「③-2」のように表示する。また、S0段階で「ワタシは」が使用されるかどうかによって、「ワタシは」の現れるタイプと位置は少し変わる。S0段階で「ワタシは」が使用された場合、「ワタシは」の使用位置は図1のようになるが、使用されていない場合、図2になる。

以上の基準にしたがって、母語話者と学習者に主題として使用された「ワタシは」を、タイプごとにその使用数を数え、表4にまとめた。全てのタイプにおいて、学習者群と母語話者群の間に有意差が見られ、過剰使用を確認した。

表4 学習者と母語話者の段階別の主題「ワタシは」の使用数

	人数	S0段階の「ワタシは」			S1段階の「ワタシは」		総計
		タイプ①	タイプ②	タイプ③	タイプ②	タイプ③	
母語話者	50	1 (0.02) ¹⁰	8 (0.18)	1 (0.02)			10
学習者	141	43 (0.27)	228 (1.82)	57 (0.36)			328
有意確差		0.00	0.00	0.00			

4-2-3 S0段階の「ワタシは」の過剰使用の特徴ータイプ①

まず、母語話者の会話(6)と学習者の会話(7)を通して、S0段階の「ワタシは」の使用特徴を考察する。

(6)のK-6の発話「私は週三回入っているんですけど」で、「ワタシは」と呼応する述語「入っている」が初めて使用されているため、K-6の「私は」はS0段階の「ワタシは」の使用である。S0段階では、「ワタシは」という主題の存在する環境はまだ未構築であるため、K-6以前の会話は誰のことについて話しているのか聞き手はまだ把握して

¹⁰ () の中は1人あたりの使用数

いないと考えられる。従って、話し手は「ワタシは」を用いて、より明確に“ワタシは週三日入っている”と店長に提示している。

(6) [調査 ID を提示する発話の後] (母語話者 JJJ28 RP1)

K-4 はいえーと、アルバイトの日数の話なんですけど

C-5 はいはい

K-6 今は、えっと私は週三回入っているんですけど

中国人学習者の会話 (7) も同じく、会話の冒頭では、「ワタシは」という主題の存在する環境がまだ構築されていないため、「ワタシは」を言語化している。

(7) [会話の冒頭] (学習者 CCT11 RP1)

K-2 CCT11 です、店長さん〈はい〉私は、週に〈うん〉三日〈うん〉が、アルバイトをします、〈うん〉でも一、学校の宿題は、いっぱいたくさんあります、〈うん、うんうん〉疲れました、〈うんうん〉週に、う、んよえ二日？に〈うん〉変わり、たいです

S0 段階の発話において、聞き手にとっては、話し手の現行の発話が誰についてのものか、まだ明瞭ではないため、主題である「ワタシは」を言わないと「誰が？」と聞かれる可能性があると考えられる。母語話者の使用は 1 回しかないのに、なぜ「ワタシは」と言わなくても聞き手はわかるのだろうか。

甲斐(1999)は、発話には場面依存型と文脈依存型の二つのタイプがあるとしている。S0 段階では、「ワタシは」を明示していない場合、聞き手は述語の助けなどで、現行の発話文の主題は目の前の話し手であることが判断でき、主題の「ワタシは」という存在を発話現場から引っ張ってくることができる。また、甲斐(1999)で述べられている「述語の意味の助け」というのは、述語の意味の中には主語名詞句の指示対象として話し手を取りやすい述語があるということである。述語には、ほかの条件が同じであれば、話者の指示しやすさについての程度があり、それは「話者指向度」と呼ばれる。話者指向度の強弱関係は以下の図 3 のように示される。

主語指向度 1 話者を指示対象として求める程度 (話者指向度)

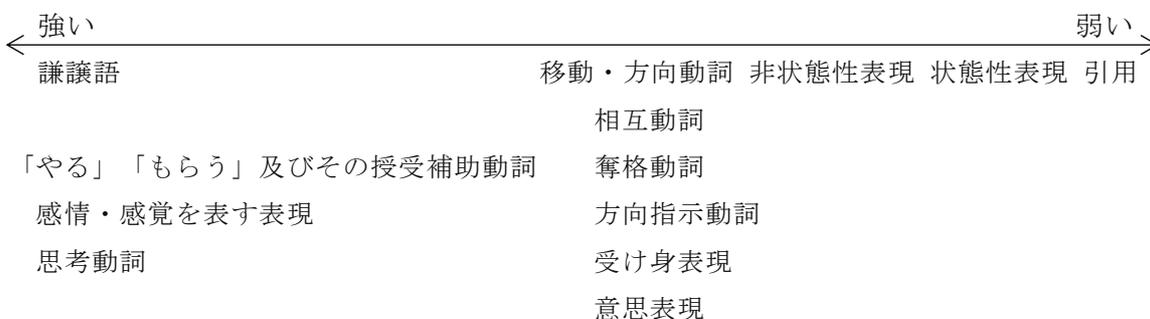


図 3 主語指向度 1 話者を指示対象として求める程度 (話者指向度)

(甲斐 1999 : 49)

図の左に寄るほど、話者指向度が強くなるため、主語名詞句が話し手であることを推測でき、主語名詞句に唯一性が与えられる。

今回収集した会話では、日本語母語話者が S0 段階で「ワタシは」を用いていない発話は、(8) のような謙譲語を使った場面が多い。

(8) [自己紹介の直後] (母語話者 JJJ03 RP1)

K-7 今は、週、三、入らせていただいているんですぞ

C-8 はい

K-9 ちょっとあの一、ま忙しいので、週二回に減ら、せないかなと思ひまして

K-7 で初めて「ワタシは」と呼応する述語「入らせていただいている」が使用され、それによって「ワタシは」という主題の存在する環境が作られる。その後、S1 段階に入る。謙譲語は「話者指向度」が強いため、その述語は当該発話文において、S0 段階における文の主題を提示することができる。これを図 4 で示す。

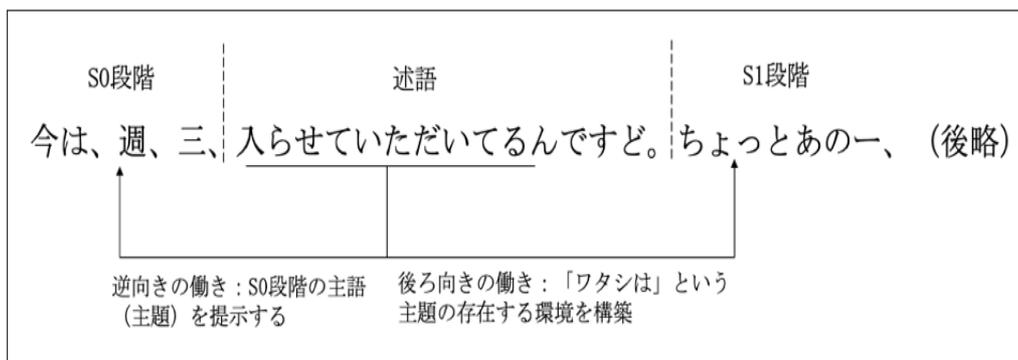


図 4 「ワタシは」と対応する述語の働き

つまり、述語（入らせていただいている）が逆向きに働き、当該の発話文の冒頭に遡って、その主題は「ワタシ」であったことを聞き手は判断できるのである。

一方、中国語は客観的な捉え方をする言語であるため、中国人学習者は日本語を使用する時も、自分の存在を客観的に捉えている。また、中国人学習者は述語の逆向きに働く機能を認識していないため、S0 段階において、主題である「ワタシは」を明確に言わないと、聞き手に疑問を抱かせてしまうと考え、「ワタシは」を言語化するのだろう。

以上の議論から、中国人学習者が、S0 段階において、当該の発話が現場に依存していることを意識できず、述語が逆向きに働くという機能を利用せずに使用する「ワタシは」を、過剰使用のタイプ①とする。

4-2-4 S1 段階の「ワタシは」の過剰使用の特徴—タイプ②

タイプ②は図 1 と図 2 の「②」の位置に現れる。つまり、「ワタシは」という主題の存在する環境をすでに構築している状況において、話し手が再度、「ワタシは」を文の主題として言語化する使用である。

- (9) [話のやりとりをした後で、店長がもう一回依頼する] (母語話者 JJJ09 RP2)
- C-19 あまあ確かにねー〈はいー〉でももう接客の方(ほう)はほんとにねーあのJJ
さんいないとまわらない、ぐらいになっているのは私も良く知ってるんだけどもー
〈はいー〉あの一ちょっとね、こう長く勤めてくれているのでこう仕事
の幅をちょっと広げる感じの意味でね
- K-20 いやいやいや
- C-21 こう調理の方もちょっと入ってくださったら助かるかなー
- K-22 私はーやりたくないです

(9)の発話では、前文 K-10 で「いやいやあたし無理です」という発話があり、そこで「ワタシは」と対応する述語(無理です)が現れる。これ以降の発話は S1 段階に入っていく店長は K の「無理です」「料理全然できません」などの婉曲的な断りに対して、C-13、C-19、C-21 でまた何度も依頼しようとしている。それに対して、K は K-14 の「接客の方が好きなので」と K-16 の「料理の方はやりたくないですよー」など、一連の理由を言った末、まだ諦めていない店長に対して「私はやりたくないです」と「ワタシは」を言語化し、店長の依頼を断っている。店長にしつこく依頼されたために「ワタシは」と明確に発言している、という感じを受ける。

付(2008)は、日本語の一人称代名詞は自己主張の意味合いが強いため、待遇表現でなくても、目下の人(目上の人)に向かって発話する時、一人称代名詞を避ける傾向が見られる、と指摘している。そのため、母語話者は、店長に対して、「ワタシは」を使うと、自己主張の意味合いが強くなるため、その使用を控えるものと思われる。ただし、今回のロールプレイにおける指示は「簡単に依頼を受けてしまったり、被検者の断りをすぐに受け入れたりするのではなく、何度かやり取りをすること」(迫田 2016:33)となっている。つまり、店長に繰り返し依頼された場合、自分の主張を強調しないと、また何らかの理由で説得されるので、「ワタシは」を言語化し、自分の意見をはっきり主張するのだろう。日本語母語話者の S1 段階における「ワタシは」の使用は、ほとんど店長にしつこく説得された末、それを断るのに使用されたものである。

一方、学習者の使用は自己主張として読み取れる発話もあるが、(10)のようにいちいち「ワタシは」をつけて発話し、自己主張しなくてもいいような発話もたくさんあった。

- (10) [店長 C の依頼に対し、K は料理が下手だと理由を述べた後] (学習者 CCM25RP2)
- C-11 そうかなでもなかなか上手そうに見えるよ
- K-12 あ{笑}わしし(私)は家に料理を作ることが少ないんですね、んーいつもいつも料理屋で料理が、料理を食べ、食べます、んーんけんしゅ、あー経験がありませんでした
- C-13 あーそうでもまあ〈そう〉おいしいものを外でたくさん食べてるみたいだから、きっとあの練習したら上手になると思うよ、どうかな

K-14 店長、店長さん、私はあーうーん最近いろいろな別のこのん一学校で別のことがいろいろありますー、時間が足りないんですね

中国人学習者は、日本語で発話する時でも、母語の影響で、自分の存在を客観的に捉え、明示して発話していると考えられる。その結果、特に自己主張の強調が必要ではない場合でも使ってしまう、日本語母語話者より有意に多く使用してしまっている。

中国人学習者が S1 段階で、強い自己主張となってしまうことを意識せずに用いた「ワタシは」を、過剰使用のタイプ②とする。

4-2-5 S1 段階の「ワタシは」の過剰使用特徴—タイプ③

S1 段階で、話し手がすでに同一ターンの中で「ワタシは」を文の主題として言語化し、明確に提示した後であるにもかかわらず、再び使用される「ワタシは」を、タイプ③の連続使用とする。図1と図2においては、③の位置に現れる。

(11) [店長が店の事情を説明した直後] (母語話者 JJJ24 RP2)

C-7 料理の担当に代わってもらって事っていうのはできますか？

K-8 んー私はあまり料理は、んー、あまりというよりは、とても苦手としています〈ええ〉、そして、私は接客の仕事をしたくて今の仕事をしていますので〈はいはい〉、できれば料理よりは接客をメインに活動したい、と思っています

(11) では、K-4の「料理を担当してほしいという申し出があると思うんですが」の発話文に、初めて「ワタシは」と呼応する述語「思う」が話し手の発話の中で使用され、以降の発話文は S1 段階の発話となる。K-8の1回目の「ワタシは」は自己主張を強調していると思われる。そして、2回目の「ワタシは」は自己主張のレベルをさらに上げている。「店長に頼まれ、依頼を承諾したほうがいいですが、私は料理が下手ですし、接客の仕事をこのまましたいので、引き受けません」という摩擦を引き起こしかねない内容である。2回目以降の「ワタシは」は、さらに明確に自分の主張を述べ、依頼を断ろうとするときに現れる。

母語話者は、「ワタシは」を入れると、このような摩擦を引き起こしかねないと分かっているため、自分の主張を強調したくても、全ての箇所に「ワタシは」を入れるのではなく、要所のみに入れていくわけである。特に、このような連続の「ワタシは」の使用は、1例しか見られなかった。

これに対して、学習者が S1 段階においてタイプ③として使用した「ワタシは」は、以下のようなものである。

(12) [店長は、調理長に教えてもらった後、料理を勉強するいいチャンスになる、と述べた後] (学習者 CCM29 RP2)

K-6 いいチャンス、んーと思います〈うん〉から、うん、って一、けれども、でも一
んー私は料理を作るとか、す、お、好き、好きません、あ、好き、好きない（好
きじゃない）です、〈うーん〉んーでも、私は一あーん、日本人と会話一を一し
たいです、それかもっと考えてできません

この発話を中国語にすると、(12)'になる。

(12)' 我不喜欢做菜。但是、我喜欢和日本人聊天。

(12)'では、中国語の一人称主語の「我」を連続して使っても、違和感がなく、強い自己主張のニュアンスも感じられない。このことから、S1段階のタイプ③の「ワタシは」の過剰使用は、学習者の母語の影響があると考えられる。

三上(1960)によれば、「Xハ」はピリオド(マル、句点)を越えて、次の文まで及んでいく機能を持っており、次の文の主題は、前文の主題に依存して、一文として省略することができる、とされている。しかしながら、学習者は「ハ」の射程を理解しておらず、連続して「ワタシは」を使用し、文の主題を明示し続けなければならない、と考えたのではないだろうか。

また、「私は料理を作るのが好きじゃないですし、日本人と話したいです。」のように、うまく接続助詞を運用できていれば、二回目の「ワタシは」の使用は回避できる。

以上のように、「ワタシは」がすでに出ているにも関わらず、学習者は母語の影響のほか、接続助詞をうまく運用できないことや、「ハ」の射程を理解していないことなどから、「ワタシは」を連続使用してしまう。これを、「ワタシは」の過剰使用のタイプ③とする。

4-3 フィラー的な用法

会話では、書くようにじっくり考えて表現内容を産出できるわけではなく、言い直したり、繰り返したりする発話も多い。話の内容がまだ整理できていないうちは、「あの」「えーと」などのフィラーの代わりに「ワタシは」を用い、考える時間を稼いで話の内容を考えながら発話する、という現象が存在する。

(13) [店長の依頼を断った直後] (学習者 CCT35 RP2)

C-11 あ大丈夫、あの一教えるから一

K-12 でも一私は一、私は一、家で一料理を作ったこともありませんし一〈ん一〉、
そな(そんな)ことを、したら一、たぶん{笑}、悪いことがあると思いまっ
す(思います)よ{笑}

(14) (学習者 CCM45 RP1)

K-8 あーん、あの私は、友達は、アルバイトはしたいです(うん) もし彼はいいから
わた私は、明日彼と一緒に(うん)、あーん一緒にアルバイトします、これはいい
いですか

(13) の繰り返しの使用と (14) の言い直しの使用において、最初に発された「ワタシは」は、実質的な意味を持たないため、フィラー的な用法と捉えることができる。

従って、このような“とりあえずの「ワタシは」”を、フィラーのような機能を有していると考えて、過剰使用のタイプ④とする。

5. おわりに

本稿は「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を使い、中国人学習者が会話する時の「ワタシは」の過剰使用について考察した。その結果、過剰使用の特徴を 4 種類に分けることができた。以下の表 5 に示す。

表 5 過剰使用種類のまとめ

過剰使用タイプ	特徴	原因
タイプ①	S0 段階における会話冒頭の「ワタシは」の使用。	当該の発話が現場に依存していることを意識できず、述語が逆向きに働くという機能を理解していないため。
タイプ②	S1 段階における不用意な「ワタシは」の使用	「ワタシは」の強い自己主張の意味合いを意識できていないため。
タイプ③	S1 段階における連続の「ワタシは」の使用	接続助詞をうまく運用できないことや、「ハ」の射程を理解していないため。
タイプ④	フィラー的な用法で、“とりあえず言い出した「ワタシは」”	会話を整理する時間を稼ぐ時、「あの」「えーと」などのフィラーの使用を認識できていないため。

今後は、本研究で明らかにした中国人学習者の過剰使用の特徴をもとに、この結論をどのように日本語教育に応用し、中国人学習者の指導に生かせるのかを考えていきたい。今回使用したロールプレイは目上の人に対する依頼場面と断る場面であるが、ほかの会話場面を考察する必要もあるだろう。また、「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」では、学習者を母語別・教育環境別に分けている。今回の調査では至らなかったが、中国人学習者以外にも、他言語を母語とする学習者の一人称代名詞の使用特徴も分析したい。そして、学習者の一人称代名詞使用の指導に活用するため、「ワタシは」だけではなく、「ワタシ+無助詞」「ワタシが」「ワタシも」を含め、一人称代名詞全般を考察する必要もあるだろう。

参考文献

- 甲斐ますみ (1999) 「日本語の省略現象」大阪外国語大学博士論文
- 甲斐ますみ (2000) 「談話における 1・2 人称主語の言語化・非言語化」『言語研究』117, pp.71-100.
- 楠本徹也 (2010) 「日本語の対話テキストにおける自称詞・対象詞の主題機能-中国人学習者の日本語による初対面会話からの分析-」『東京外国語大学論集』(81), pp.155-165.
- 迫田久美子 (2016) 『I-JAS 構築に関する最終報告書 海外連携による日本語学習者コーパスの構築-研究と構築の有機的な繋がりに基づいて-』(平成 24~27 年度科学研究費助成事業(基盤研究 A) 研究成果報告書) 国立国語研究所日本語教育研究・情報センター
- 曾儀婷 (2004) 「台湾の日本語学習者の作文に見られる日本語の一人称代名詞の使用について」『国際協力研究誌』10 (2), pp.29-47.
- 張希朱 (2011) 「KY コーパスにおける学習者の「私は」の使用に関する一考察」『日本稿』47 号, pp.215-232, 한국외국어대학교 일본연구소
- 野田尚史 (1996) 『「は」と「が」新日本語文法選書 1』くろしお出版
- 付敏 (2008) 「日中両言語の待遇表現における人称代名詞の制約-一人称、二人称代名詞を中心に-」『人間文化研究科年報』23, pp.133-142.
- 三上章 (1960) 『象は鼻が長い』くろしお出版.
- 森山新 (2006) 「視点についての認知言語学的考察」『日本語教育研究』5, pp.5-14.

資料

『I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス』

(埼玉大学大学院人文社会科学研究所博士前期課程修了生)